日本と西ヨーロッパにおける 大学教育に及ぼす社会的要因

B. Huybrechts*

西ヨーロッパの大学機構を述べることは容易なことではありません。皆さんもご存知のように、西ヨーロッパは多くの国々から成り、異なる独自の文化と歴史をもっています。それゆえに、大学組織も国ごとに少しずつ異なっています。例えば、博士課程の期間はイギリスでは3年、ドイツでは5年と異なっています。西ヨーロッパの大学教育カリキュラムは国ごとに異なるため、ここではそれについては議論せず、むしろ大学教育に及ぼす社会的、文化的要因を詳細に述べようと思います。EC(欧州連合)における高校卒業後の教育システムについては文献(1)を参照して下さい。

1. 社会における大学の機能

西ヨーロッパと日本の大学の大きな違いの1つは、それぞれの起源にあります。西ヨーロッパの大学は中世のころにキリスト教会によって始まりました。表1にヨーロッパの幾つかの有名大学とその創立記録が載せてあります。これに対し日本の大学は19世紀後半に創立され、20世紀に始まりました。表2に日本の幾つかの有名大学の創立記録を載せる。最も古い東京大学は1877年に創立され、始めは西ヨーロッパ人とアメリカ人が各自、自分たちの言葉で教えていました。1918年からは多くの専門学校が大学へと変化したことが特徴的です。西ヨーロッパではこのような変化は起こらず、今だに多くの多様化した専門学校が残っています。

西ヨーロッパでは大学に入ることはそんなに難しいことはありません。ベルギーではほとんど選抜がなく、高校を卒

表1 ヨーロッパにある有名大学の創立記録。

大学名, 国名	創立年
University of Oxford, United Kingdom	13 th Century
University of Cambridge, United Kingdom	13 th Century
Leiden State University, Netherlands	1575
University of Coimbra, Portugal	1290
Katholieke Universiteit Leuven, Catholic University Louvain, Belgium	1426
University of Uppsala, Sweden	1477
Italy State University, Italy	1303

表2 日本にある有名大学の創立記録。

大学名	創立年
東京大学	1877
京都大学	1897
東北大学	1907
九州大学	1910

表3 ベルギーにある Katholieke Universiteit Leuven の学部1年生における平均進級率。

人文科学	43.0%
医学	55.4%
理工科学	56.0%
平均	47.7%

業した人は誰でも自分たちの選択で大学へ入学できます。幾つかの国にはある種の選抜がありますが、それは日本のように厳しいものではありません。それでも、まだ多くの学生が大学へ行くことを選びません。例えば、ベルギーのフランダースでは高校卒業後、学生の30%だけが大学に行きます。残りの70%は専門学校へ行きます。多くの若者が大学へ行くのを拒む主な理由は、大学の教育カリキュラムが非常に厳しいことにあります。年に一度試験があり多くの学生が落第しています。表3に学部1年生について、1987~1990年における3年間の人文科学、医学、理工科学における進級者数の統計が示してあります。この表から半分以上の学生が試験に失敗していることが分かります。この結果は日本の大学と非常に異なっていると言えます。西ヨーロッパの人々にとっては、日本の大学生はあまり勉強していないというイメージがあります。西ヨーロッパ人の多くは、これをお金の無駄使いのように思っています。それにも拘わらず、日本社会がこれを支えている理由は2つ存在します。

その1つは日本の会社は新入社員をトレーニングする余

* 長岡技術科学大学助手；工学部電気系(〒940-21 長岡市上富岡町1603-1)
Social Factors Influencing Academic Education in Europe and Japan; Huybrechts Ben (Faculty of Engineering, Nagaoka University of Technology, Nagaoka)
Keywords: vertical society, university education, Japan, Europe
1994年7月4日受理

裕があるということです。西ヨーロッパの会社では反対に専門職のための特別な能力・経験をもっている人を採用します。そして、たとえば新卒のエンジニアは会社でただちに管理職につく場合がほとんどです。しかしながらこれは、経験なしでは職につくことはできないし、仕事なしでは経験もできないという問題を招いています。会社自体のトレーニングは日本と比較して最小限です。つまり、西ヨーロッパの大学は何にでも応用がきく労働力としての学生を育てようとしているわけです。そして、新しいチャレンジにすぐに適応し、企業と社会でのトレーニングを最小限にするという役割を担うわけです。

2 番目の理由は、西ヨーロッパと日本で非常に重要な違いを見せている社会構造にあると思います。日本の社会はタテ式に作られてきました。それはいつも経験豊富で知識がある先輩と、指導される後輩を意味します。タテ社会のシステムは西側では全く知られていません。西欧ではヨコ式構造は非常に典型的なものです。それは一般に特徴のある人々がグループを作り、その中では多少の階級の違いは無視されています。これらのグループは明確に区別されており、その例を挙げれば学生と教授、労働者と経営者、看護婦と医者などというように分かれています。大学を例に挙げると、西欧では教授は自分の学生よりも同じ課の教授たちと結び付きが強くなっています。これは日本と逆で、日本の場合は教授は研究室の助教授、助手、学生との結び付きが強くなっています。以上に挙げたようなグループ精神は日本では非常に弱くなっています。文献(2)には西欧と日本の社会の違いが分かりやすく説明されています。

西欧では会社で仕事をする時には、もちろん上司がいますが、皆、大体において個人単位で仕事をします。上司は部下と部屋を一緒にせず、部下との関係は日本のように親密ではありません。また、部下は仕事の一般的説明を与えられるのみで、この仕事を成功させる責任を持ち、上司の助けはほとんどありません。したがって西欧の大学は社会の中で独立して働けるような強い性格を持ち、責任感と指導力のある人を育成することに努めています。

2. 大学の社会構造

ベルギーの大学でみられるヨコ社会の例の1つに、教授や大学から完全に独立した学生組織が挙げられます。これらのメンバーは学生間で民主的に選ばれ、グループとして学生を代表します。そして問題が生じた時、または教授陣に問題がある時に運動を起こします。これは現在の日本の状況とは異なり、日本ではこういった学生組織があっても非常に弱いものです。

ヨコ社会のもたらした最も重要な結果は、大学の研究室、そして先輩と後輩の関係がないということにあります。西欧の大学では、たとえ教授、助教授、博士課程学生というよう

なタテ構造を見ることができても、一般に、研究室のメンバーはグループを作らず、それぞれ異なった部屋で各自勉強します。このように西ヨーロッパでは普通、研究室がなく、あったとしてもその中での結び付きは薄いものです。修士課程の学生は研究テーマを教授から与えられ、自分だけを主に頼ることになります。ガイダンスを博士課程の人から時々受けることができますが、普通は非常に限られています。私がベルギーで修士号を取った時は、毎月1回だけ15分間教授の前で自分のデータを発表しディスカッションしました。このことは学生たちに非常に強い責任感を与えることになります。なぜなら、もし良い論文が書けなかったなら落第、もしくは卒業延期になるからです。

研究を始める学生は、しかしながら始める前からよく教育されています。例えば、Katholieke Universiteit Leuven の工学部は次のように構成されています。学生は自分のやりたい技術方面には関係なく、最初の2年間は必修科目(分析学、統計学、数学、代数学、幾何学、物理学、力学、化学のような科目)を学ばなければなりません。これらの授業は午前中にあり、午後は小グループに分かれ実験、実習に充てられています。これらの学生実験はアシスタントにより行われ、午前中に教わった授業を復習します。このアシスタントは日本の助手とは異なり、むしろ日本の博士課程の学生に近い立場ですが、給料をもらっています。彼らは自分自身の研究時間と教える時間を区別しています。彼らは学生としてではなくスタッフとして考えられています。3年になると自分の専門分野を選ばなくてはなりません。しかしながらまだ講義の50%が熱力学、エンジン、機械、水力学、電子工学、土木工学などのような一般科目です。また経営技術、経済学、哲学などのような専門科目でないものもあります。そしてほとんど毎日、演習と実験が午後に行われます。実験は小グループに分かれ測定装置の使い方を学びます。最終学年で研究を始めた時には実験装置の知識を持っています。装置のメンテナンスは、すべて専門技術者が行います。しかし日本では技術者の不足のために学生が各自で修理しなければなりません。

1つの研究室の全学生が参加し、実験データを発表するようなセミナーは、西ヨーロッパには存在しません。多くの西ヨーロッパの大学では、学生や研究者たちは1年に1,2回の割合で、同じ部門の人の前で自分たちの研究を発表する機会を与えられます。また、多くの日本の大学では、修士または博士課程の最終発表の前に、学生たちは発表を修正してもらうために教授、学生の前で練習を行います。こうしたことは西ヨーロッパでは普通見うけられず、学生たちは自分たちですべてを準備し、発表は試験と同じ扱いにされています。

日本で研究室に所属しているということは、第2の国籍、または第2の家族をもっているのと同じことになります。日本の学生たちは、実際に研究室に住んでいるのです。彼らは、昼食、夕食、飲み会、スポーツ等で研究室の仲間と常に

一緒です。たとえ自由時間であっても、彼らは研究室の仲間と行動を共にします。西ヨーロッパの学生は、同じ先生の下にいる者でも普通は日本の学生たちのように親密にはなりません。彼らは大学の外に自分たちの私生活の大部分をもっているからです。

西ヨーロッパでは、学生と教授の関係は教育というものだけに限られています。教授は個人的問題を話せるようなカウンセラーとしては考えられておらず、私生活と教育は厳密に区別されています。教授の仕事は、教えることだけにあり、学生の他の問題に関しては責任がありません。日本では、しかしながら、そのシステムは非常に異なっています。教授は卒業生の結婚式に招待され、またいろいろな頼みことを聞きます。そして、卒業する学生たちに良い就職先を見つけてやることに責任があります。西ヨーロッパでは、学生は入社したい会社に自らコンタクトしなければならず、教授からの何らかの手助けがある者は、自主性と独創性に欠けると判断されます。

3. 研究におけるタテ社会の影響

日本はよく創造性に欠け、新しい発想がないと非難されがちです。創造性の欠落は、日本の社会構造と密接な関係があります。独創的になるためには、奇抜なアイデアを考案するようにもっと大胆にならなければなりません。もし個々に研究室があれば、人から笑われることなしに、奇抜なアイデアを開発する機会が得られます。それを1人で開発し、後で発表すればいいのです。日本の大学院では、指導してくれる先輩がいます。このシステムは多くの専門知識に関するノウハウの損失を避け、持続性のある研究には適していますが、独創力と個人の表現力の妨げになります。これは、自分のアイデアを向上させる機会がほとんど無いことから起こります。表現力と独創力の欠落は、研究中において学生たちが同じ部屋に住み、ほとんどプライバシーがないという事実から起こるものです。しかし反対に、1つの部屋を共有することはグループ精神を育て、さらに情報入手にも役立ちます。それゆえに両方の長所を生かす1つの方法は、これら2つの要素を効果的に組合せることです。幾つかの日本の会社はこのことを理解し、会社をオープン形式に分割することによって妥協しようとしています。

図1 科学技術の蓄積と輸送における全世界の周期⁽³⁾。

4. 結 論

図1から過去の歴史における技術開発の周期が分かります。日本は科学の分野ではリーダーの立場にあり、科学的発見を積み重ね、今ではそれを他国へ輸出し始めています。しかし、一方では新しい領域を創り、もっと独創的にならなければなりません。1つの大きな障害は、著者の意見では、自由開発と創造を遮るタテ社会にあると思います。これを改善していくためには、社会に変化を起こす必要があります。これには10~20年あるいはそれ以上かかるだろうと思われます。それゆえに、大学は学生を創造的にさせ新しい道をつくる責任と課題を持たなくてはなりません。しかし、タテ社会構造が日本の大学にあるため、これは簡単なことではありません。

文 献

- (1) *A Guide to Higher Education Systems and Qualifications in the European Community*, Ed. by Anita Wijnaeds van Resandt, Pub. Kogan Page, 120 Pentonville Road, London.
- (2) C. Nakane: *Japanese Society*, Charles E. Tuttle Co. Publishers, Tokyo, (1989).
- (3) C. Watanabe and Y. Honda: *Japan and the World Economy*, 4(1992), 47.